

社会科学概論序説

青山秀夫

はじめ

本稿は社会科学概論の試論的粗描である。最初、この趣旨を説明しながら、すこし断り書をのべたい。

1) わが国の社会科学概論には方法論を中心としたものが多いようである。また、英米では、経済学・政治学・社会学などのコムパクトな概説を集め、これに序説をそえたものが、よく見られる。前の場合は、ドイツの新カント学派の文化科学方法論などを中心にしながら、「社会科学（文化科学）とは何か」を論ずるわけだが、形式的な学問論を過度に重視する点、賛成しかねる。また後の「盛合せ」方式も、どうも、賛成しかねる。ここではこの二つの型とはちがった形で、社会科学概論をまとめて見たい。

2) 本稿はこの意味の「私の社会科学概論」の要約である。しかし、シラバスという言葉で連想されるような項目の羅列でなく、大筋を説明した点で一種のデッサンであり、未定稿という意味で試論的である。なお、付加すべき事柄として、(a)人間とその行動に関する主要な概念図式、(b)宗教・経済・政治・法などにそれぞれ固有な世界とそのロジック（固有法則性）、(c)人間生活における（家族・地域社会）・民族・国家・文化・教育・伝統などの問題、(d)近代社会および産業社会の概説などがあるが、講義では、少くとも参考書への言及程度のことは果したいと思う。

3) 粗描なので細かい説明を省くが、引用も最小限度にとどめた。本稿は講義ノートにもとづくが、後記ですこしその由来を書き加えた。

I 社会科学の領域

A 概観

社会科学という言葉は、しばしば自然科学と対照してつかわれる。ただこの対照については、いろいろ注意すべきことが多い。

いま世界各国の大学・研究所などで、緊密な国際的交流の下に、人間と社会とその文化の研究が、ちょうど自然科学の場合と同様に行われている。社会科学は、こういう人間・社会・文化の研究の重要な部分であるが、必ずしもその全部とはいがたい。古くから the Humanities という言葉がある。人文諸学とか、人文（諸）科学とか訳す他ないが、あとでくわしく説明するように、歴史・古典・文学・美術・哲学など、身分ある紳士がたしなんでいなければならぬ教養的学問がこの the Humanities, the Humanistic Studies である。社会科学は、この人文諸学と区別するのが普通であるから、それ以外の専門的研究をさすことになる。したがって、経済学、社会学、政治学、宗教学、社会人類学（文化人類学）、社会心理学などは、ほぼその代表的分野になるが、その境界となると、すこし立入った注意が必要である。以下、五項に分ってこれを説明する。

(一) 統計的研究方法は社会科学にとってきわめて重要であり、しかも重要度を高めつつあり、その知識は社会科学を学ぶものに不可欠だが、統計学 (Statistics) そのものは方法の研究だから、社会科学に加えないのが普通である。もっともそれを利用した計量経済学は、経済学の一部門として、社会科学にぞくするし、もし計量政治学、計量社会学という如きものがあれば、それも社会科学に加えねばなるまい。

(二) 心理学をどう取扱うかはやや微妙である。

心理学は実験を重要視する。こういうところから、1930年代以前は、自然科学的方法を用いることを理由として、対象は人間でありながら、社会科学(文化科学)にこれを加えぬ意見が強かった。

しかし、生理心理学、比較心理学をふくめて、心理学における人間の研究は社会科学一般にとって重要であり、その重要度は高まりつつある。なおこれと同時に、人類学(形質人類学をふくめて)、考古学における人間の研究の進歩も盛んであるが、これも社会科学に対して同様の意義をもっている。人間科学(Human Science)、行動科学(Behavioral Science)というときは、恐らくこういう新しい分野を含めることになろうが、社会科学という場合どう取扱うかは、人によって異なる。

(三) 通常、社会の法律制度は司法機構(法廷court)と法曹家(jurist)から成り、法典(code)と事実証拠(evidence)とを根拠として、法規を正しく解釈適用することによって機能する。ところで法学(jurisprudence)と呼ばれる学問の主要部分は、この法規の解釈に関連するところの、いわゆる解釈学(dogmatics)である(概念法学)。かような解釈学は、個々の条文について、それをどう解釈するのが正しいかを問題とする点で、神学の教義学と同様であり、「科学」とは別個のものと考えられるから、社会科学には属せしめない。

この意味でいわゆる法学の大部分は社会科学でないことになる。これに対して最近、法社会学が発展しつつある。これは、法体系およびその機能を、政治・経済・宗教などと同様の社会的事実と考え、この観点からこれを社会学的に分析するものである。かような法社会学は明らかに社会科学にぞくする。

(四) これまで政治思想は、社会科学の成立発展に著しい影響を残した。この政治思想についてすこし述べたい。

『論語』に「民信なくんば〔国〕立たず」(顔淵)とか、「国をたもち家をたもつ者は〔財の〕とぼしき患えずして均しからざるを患う」(季子)という有名な言葉がある。これは政治哲学、しかも立派な政治哲学である。Plato (427B. C. ~ 342 B. C.) の「国家」と Aristotle (384B. C. ~ 327 B. C.) の「政治学」にはじまる西洋の政治学

(Politics) の伝統については、ここに立入らないが、その諸文献の中には、上記の論語のそれと同様の政治哲学的主張が、さまざまの政治社会学的事実分析と混在していた。

先に社会科学の代表的部門の一つとして政治学を挙げたが、上記の政治哲学的部分は、今の科学論からいって、科学以外のものであるから、最初のこの説明は修正せねばならぬ。今日社会科学の一部門として政治学を考えるときは、政治社会学と最近発達しつつある政治現象(例えは投票、政党支持)の数量的分析がその重要部分である。

(五) 倫理学は明かに社会科学ではない。しかし道徳を社会現象として社会にむすびつけて考察する道徳社会学は社会科学であるし、その人類学的研究も社会科学にぞくする。宗教学を、上記のように社会科学と見ることに抵抗を感じる人もあるかも知れないが、社会との関連で宗教を扱う宗教社会学を社会科学の一つの(しかも重要な)部門と見ることに反対する人はあるまい。また、教育学と教育社会学、言語学と言語社会学、美学・芸術学と芸術社会学との関係も同様であるし、医療社会学も、医療そのものは一つの技術であるとしても、社会科学である。さらに、経済学の応用部門たる教育経済学、医療経済学のごときも、社会科学である。

社会科学の周辺の事情は、以上5点に分ってのべた通りである。劃然と境界線を引くことはできず、その時々の事情によって境界は多少動搖するが、以下のごとき社会科学の概観が、これによって妨げられることは、ほとんどない。

B 人文諸学 the Humanities

社会科学とならんで人文科学という言葉が、わが国ではかなりよく使われるが、便宜的利用が多く、社会科学と人文科学との区別もやや曖昧なようである。

何れにしても、Social Sciencesを考える場合、同時にこれと並んで、いわゆる the Humanitiesを考える必要があること、本章Aで論じた通りである。この“the Humanities”をここでは、一般的には人文諸学、時としては人文(諸)科学と呼ぶことにするが、この「人文諸学」(the Humanities)は確立された伝統をもつ言葉であり、その由来を

確認しておくことは、Social Sciences を考える場合、重要な前提になる。この意味からこの言葉について説明しておきたい。

それでは the Humanities とは何か。たとえば『岩波英和大辞典』は「(ギリシャ・ラテンの)古典文学、(自然科学・社会科学に対する)人文科学」と説明する。大体はこれでよろしいが、OED における Humanity の項目によってさらに精確な説明を求めれば次の通りである。

Humanity (*hiu'mæ·niti*). [a. F. *humanité* (older forms *humeinete*, *humanitet*, 12th c. in Littré), ad. L. *hūmānität-em*, f. *hūmānus* HUMAN.]

I. Connected with *human*.

.....
.....

II. Connected with *humane*.

3. The character of quality of being humane; behaviour or disposition towards others such as befits a man.

.....
.....

4. Learning or literature concerned with human culture: a term including the various branches of polite scholarship, as grammar, rhetoric, poetry, and esp. the study of the ancient Latin and Greek classics. a. sing. (Still used in the Scottish Universities, in the sense of 'the study of the Latin language and literature'.)

This (=15-16th c. It *umanità*, F. *humanité*) appears to have represented L. *humanitas* in its sense of 'mental cultivation befitting a man, liberal education'. as used by Aulus Gellius, Cicero, and others; hence, taken as = 'literary culture, polite literature, *literæ humaniores*'; but it was very often, in scholastic and academic use, opposed to *divinity*, as if =secular learning.

.....
.....
b. pl. (Usually with *the*; = Fr. *les humanités*.)
.....
.....

5. *attrib.* and *Comb.*

以上の OED の説明のうち、ここで意義に関連するのは明かに 4 であるが、なおこれに付記すべきことが 3 点ある。次にこれをのべる。

(-) 以上の引用では、用語例の記述を省略したが、当然想像されるように、最初単数形で用いられ、今の複数形の *the humanities* という表現は、用語例では 18C 以後になる。なおこの *the humanities* と人文主義者(humanist)，人文主義(humanism)との関係であるが、これについては Paul Oskar Kristeller, *Renaissance Thought II : Papers on Humanism and Arts*, 1965. (Torchbook) に明快な説明があるので、引用しておこう。「Humanism」という言葉は“Humanist”に由来するが、Humanist という言葉自体は、15C 以来特殊の意味で用いられてきたものであり、恐らくは当時のイタリアの大学の学生たちのスラングに起源すると思われる。当時 *humanist* とは、*the studia humanitatis*、つまり *the humanities* の教授または学生であり、例えば *jurist* などとは区別さるべきものであった。それでは *the studia humanitatis* とは何か。古代語から借用された言葉であり、その研究学習がもつ人間的教育的效果を前取り的に強調せんがために意識的に用いられたものであるが、15C 初頭以来、文法・修辞学・詩学・歴史・道徳哲学としてリストされた教育科目のプログラム（なおこれらの科目は、すべて、ギリシア・ローマの古典の読書履習をその基礎におくものであった）を意味している。(p. 3)

(-) 仮語でこの「人文諸学」に当るのは、OED も示すとおり、*les humanités* であるが、ドイツでは事情がすこしづがう。ドイツ語の *die Humanität* は、上記の II 3 の「(純) 人間性；人道(主義)；仁愛(主義)」の意味に用いられるが「人文諸学」の意味はもたぬようである。ドイツ語辞典によると、「人文諸学」の意味で用いられる語として *Humaniora* (Wolf) が出ているが、この言葉を使った例は、最近は殆んど見ない。むしろこの国では、19C 中葉以後親しまれている *die Geisteswissenschaften*, *die Kulturwissenschaften* が *the humanities* に近接した意

味をもっている（ただし哲学を含まず）¹⁾。しかし「精神諸科学」「文化諸科学」いずれの概念も、一方では歴史の（とくに Hegel と歴史学派の影響の下での）格別の重視と、他方では Dilthey, Windelband, Rickert などの周知の學問論的論議によってドイツ独特の背景をもつようになり、かなり別個の問題に関連しているので、ここでは深く立入らない²⁾。

(二) 地質では、古い層の上に新しい層が重なっていく。古くから存在した人文諸学は、今の Social Sciences に対して、その基礎（少くともその基礎の一部分）であるから、Humanities と Social Sciences との間には、上記のような地質学的見方の可能な部分がある。——しかし、Humanities は今の Social Sciences に蔽いつくされるか、というと勿論そうではない。歴史・哲学・文学などの人文諸学は、今日なお研究と教育の対象であり、新しい研究によってたえずその内容を更新しつつある。さらに Humanities と Social Sciences とは密接な交渉をもち、Humanities も人文（諸）科学を称するようになる。この意味から、人文諸学は、隠れた古い地層としてではなく、社会科学という新しい森と並んで在存する古い森と見た方が適當である³⁾。

OED の説明ならびにこれに対する以上の付記 3 項によって人文諸学の外貌は、かなり明かになった。それでは、Humanities と Social Sciences

とは、内面的にいかなる関係にあるか。この問題についてフランスの哲学者エリック・ヴェイユ (Eric Weil) が、前にも引用した雑誌 *Dædalus*, Spring 1970 で論ずるところは興味ふかいので、次にその要点をのべておこう⁴⁾。

人文諸学と社会諸科学との間のコントラストを、ヴェイユは次のように明快に説明する。——

「humanistic studies の研究者たちが関心をもつのは、人間とその仕事・行動であり、人間的なモデルである。要するに、自由な行動主体としての人間 (man as a free agent) に関心をもつ。社会諸科学はこの点で humanistic studies とちがっている。社会諸科学でも焦点におかれるのは、やはり人間だが、しかしこの場合のそれは、その生と行動を包むところの背景的仕組によつて決定された行動主体としての (as an agent determined by the setting in which he [man] lives and acts) 人間である」念のためにいえば、ここで「自由な」行動主体というのは、別に形而上学的意味からではない。「芸術におけると、文学におけると、哲学におけると、歴史におけるとを問わず、人間がつねに彼の仕事の源泉として考えられる」点に注目して、行動主体として「自由だ」と言っているのである⁵⁾。

Humanities と Social Sciences との対照は、ヴェイユにおいて、かようにきわめて鮮かであるが、現代の人文諸科学をとて考へた場合、ただ

- 1) Erich Rothacker, *Logik und Systematik der Geisteswissenschaften*, München 1965, (Nachdruck aus : *Handbuch der Philosophie*, Abteilung II, Beitrag C, 1927) はこの二用語の由来をくわしくあとづけている。
- 2) 周知のように、戦前のわが国の社会科学論は、上記のドイツの動きに強く影響されており、おびただしい文献をうんだ。したがって、この方面のドイツの文献、当時のわが国の文献については引用を省略し、E. Rothacker, *Logik und System der Geisteswissenschaften*, München 1965 ; derselbe, *Einleitung in die Geisteswissenschaften*, Darmstadt 1972, (Nachdruck der 2. Auflage, Tübingen 1930) ; Raymond Aron, *La philosophie critique de l'histoire : Essai sur une théorie allemande de l'histoire*, 4e éd., 1969 ; Julien Freund, *Les théories des sciences humaines*, 1973, を挙げるに止める。なお、E. D. Hirsch, Jr., "Value and Knowledge in the Humanities", in *Dædalus*, Spring 1970 *Theory in Humanistic Studies*. は上記のドイツの動きを英米側から見た論文として興味がある。また同誌同号所収 T. Parsons, "Theory in the Humanities and Sociology" は、現代社会科学の方法に関して、上記のドイツの動き、とくに M. Weber の學問論におけるその成果を扱う。
- 3) いうまでもなく、現代の人文諸学は、総合大学の文学部の研究科目であるだけでなく、一般教養科目としても重要である。したがって大学教育との関連で Humanities を考えることも必要であり、恐らくこの点文献も多いと思うが、ここでは手近かな文献 2 点——J. H. Plumb(ed), *Crisis in the Humanities*, Penguin Books, 1964 ; *Dædalus*, Summer 1969, *The Future of the Humanities*. を挙るに止める。
- 4) Eric Weil, "Humanistic Studies : Their Object, Methods, and Meaning," in *Dædalus*, Spring 1970, *Theory in Humanistic Studies*. 著者についての同誌の紹介は次の通りである。Eric Weil, born in 1904, is professor of philosophy at the University of Nice in France. Mr. Weil is the author of *Philosophie Politique* (1966), *Hegel et l'Etat* (1966), *Logique de la Philosophie* (1967), *Philosophie Morale* (1969), *Problèmes Kantiens* (second ed., 1969) and the forthcoming two volumes of *Collected Essays*.
- 5) *Dædalus*, Spring 1970, p. 240.

ちにそこに、かくも鮮明な対照がそこに見出されるとは、彼は考えていないようである。今から三世代ほど前ならば、人文諸学はそれに独自な精神に貫かれていた。こういう純粹な古典的人文諸学を念頭におくときは、きわめて明瞭な社会科学との相違が浮び上るけれども、現代では——恐らく古典的純粹さを保つものと然うでないものが混在しているのであろう——人文諸学に独自な特色は漸次うすれていくし、社会科学との相違も曖昧になる。しかもこの傾向の根底には、社会の動きそのものの強い制約がある。ヴェイユはかように考えるようである。注目していい見解であるから、彼自身の言葉によって、このことをのべよう。

一方で、人文諸学が研究の良否を判定する客観的な基準をもつこと、さらにまた現代では、現代諸科学の影響の下に、方法においてもテーマについても新しい動きが見られること、この2点をヴェイユもみとめる。しかし他方において、かつて *humanistic studies* を支配した精神と現代の価値基準との間に埋めがたい深淵が存在することを、感ぜざるをえない。ヴェイユの言葉でいえば、「人文諸学研究者としてのヒューマニストたち、彼らの学生や、さらに一般公衆——こういう人々が彼らの価値理念について確信をもっていた古い時代は、もう過去った」「*humanistic studies* は、純粹な無邪気さを失ない、同時にまた、彼らの行為が絶対的価値をもつことへの確信を失った」。「かつてのヒューマニストの基準をわれわれは失ってしまった。われわれの社会に特有な基準——すなわち *efficiency*——は、人文諸学 *the humanities* の基礎をあたえることはできない。能率は手段に関するが、人文諸学の研究は、結局のところ、目的に関するものである」物質的進歩を求める社会の動きによって、人文諸学の精神的基礎が崩壊していく状況を、ヴェイユはかように分析する⁶⁾。

II 社会科学の歴史的背景

A 伝統社会における人文諸学

A1 人間の誕生——「手と言葉——そこに人間があった」と言ってよいかも知れない。人間の由来については、すでに多くの書物が、最近の研究の発展を反映しながら、書かれており、ここで立入る必要はないが、直立歩行と大脳の発達という二大特徴を中心に、以下必要なことをすこし想起しておこう¹⁾。

今のべた二足歩行、大脳（新皮質葉の連合野、その前頭葉）の発達、言語などと関連して、人間がその他さまざまの特徴をもつことは、周知のとおりである。たとえば、(1)群居生活としての家族の形成（夫婦関係の持続性）(2)「人間は生理的早産」といわれるが、身体だけでなく脳もまた生誕後長期にわたって発達が行われること²⁾、(3)火の使用、(4)生得的な言語獲得機構 *Language Acquisition Device*、(5)知能および情緒の発達などがこれである。

Ashley Montagu の便利な人類学入門書は“*Man : His First Million Years*”と題されている（現代教養文庫「人類の百万年」はその邦訳である）が、南アフリカで発掘されたアウストラロピテクス (*Australopithecus*) は、100万年前、直立して歩き、前期旧石器をつかっていた。また、ジャワ原人やペキン原人などの *Homo Erectus* は、約50万前に生存し、道具を作り火を使っており、その形跡は言葉の使用と集団の形成を推測させるという。現在人類 (*Homo Sapiens*) の出現は数万年前であるが、その出現のとき、すでに多くの卓越した能力と素質をもっていたと思われる³⁾。何れにしても、百万年の長い歳月の間、生きるために、弱肉強食の生存競争はもちろん、地質上・気象上・生態学上のさまざまな地球表面の激変との必死の闘いがつづけられたことを、われわれは忘れてはならない。

6) *Dædalus*, Spring 1970, p. 249, 250, 254.

1) この機会に、時実利彦「人間であること」(1970, 岩波新書) の好著があることを記しておきたい。

2) 時実利彦「脳の話」(1962, 岩波新書) p. 27.

3) 今西錦司「人間の誕生」(河出書房), F. Clark Howell著・寺岡和夫訳「原始人」(ライフ・ネーチュア・ライブラリー) は、何れもこういう発掘の成果を興味ふかく平明に伝えている。

スメールの楔形文字は、紀元前三千年ころまで遡るといわれるが、以上の人間の由来を思い合わせると、書かれた歴史によってわれわれが知る人類の足跡はきわめて短い。この先史時代をふくむ長い歴史の中に、人種の形成が行われ、風習言語などの根ぶかい相違も培われたことと思われる。

A: 有史時代の伝統社会——日本についていえば、漢字の渡来から日本人自身によるその習得利用までにはかなりの歳月を要したようだが、さらにここから万葉仮名や仮名がつくられ、わが国国民文化に大きな影響を及ぼしたことは、周知の通りである。一般的にいって、文字がコミュニケーションに及ぼした効果はきわめて大きいが⁴⁾、文字という *cultural innovation* は、上記のとおり、5000年ほど前にスメールの楔形文字に初まり、単独あるいは複数の源泉から、旧世界の若干部分に、長い歳月を要しながら、伝播した。しかもこの普及と平行して、メソポタミア、エジプト、インダス河地域、黃河流域などに大規模かつ持続的な国家が成立し、これ中心にいわゆる「文明」があらわれる。有文字社会に入ると、騎馬や農業や都市が平行的に誕生発達したことにもよるのであろうが、王統 *dynasty* を中心とする国家が、無文字社会の場合よりもはるかに持続的に、支配するようになったようと思われる⁵⁾。近代以前の伝統社会は、当然、無文字社会のそれと有文字社会の（したがって通常「書かれた歴史」をともなう）それとに区別されるが、いま簡単のために「伝統社会」といえばこの後の場合を指すことに限定すれば、この意味の伝統社会は「世界史」が教えるとおり、洋の東西を問わず、こういう国家と王統の対立と興亡の歴史でみたされているとい

えよう。

伝統社会のかような国家には、いうまでもなく、文武の臣僚と農工商をいとなむ庶民がいる。さらに、(一)臣僚が上下の階層、いわゆる *hierarchy* をなすよう編成されていること、また(二)国王の中央集権力がどこまでつよい（裏からいって、分権的封建的構造によって、それぞれ独自の権利と勢力をもつてたとえば封地の形で——臣僚が世襲的にもつかどうか）という視点から見た場合、実際にさまざまな場合があるだけでなく、一つの帝国・王国の歴史の中でも状況はしばしば流動的に推移することなど、周知と思われるから、ここには立入らない⁶⁾。何にしても、伝統社会の中でも、人口・物質の再生産（時としては縮少再生産）がつづけられることは当然であるが、同時にまた、それとなるんで、種々の知的活動とその所産たる文物が（文学・芸術などを含めて）再生産されていることに注目したい。

A: 伝統社会における知識人と知的伝統——伝統社会における国家の成立存続にとって、識字層（多くは識字支配層）の存在は、恐らくその重要な条件をみたしたにちがいない。文字を知り書物を通じて多くの知識を学習した子弟が（しばしば塾での教育によって）集団的に形成され、この識字層が祭祀・記録・財政・外交（さらには司法・立法）を担当するにいたったことが、広い範囲にわたる統一的集権的政治の人的基盤であったから、こういう識字層を、教育を通じて、書物・文献を要具として再生産することはきわめて重要であったにちがいない。さらにかような知識人層の伝統の中から、史書・詩歌・文学・哲学がつくられ、宗教がこれに加わるとともに、他面、さまざま

4) コムミュニケーションにおけるこういう “written language” の役割については、さしあたりウエルズ「世界文化史概論」（長谷部訳、岩波新書上）、T. Parsons, *Societies*, 1966, p. 26. を見よ。

5) かようにして紀元前3000～2000年ごろ、メソポタミア、エジプト、インダス、中国に現われる文化を、K. Jaspers, *Vom Ursprung und Ziele der Geschichte*, München 1949, S. 69.（河出「世界の大思想」II-12における邦訳ではp. 52）は古代史上の高度文化（die alten geschichtlichen Hochkulturen）と名づけ、これを形成する諸要素をくわしく論じている。なおここでの文字の役割を、彼は、治水と灌漑の組織化（Max Weber が古代のエジプトおよび中国においてその中央集権的家産官僚制を必要ならしめた事情と見た、あの治水灌漑の問題）に結びつける。すなわち、エジプトでも中国でも、またメソポタミア（チグリス・ユーフラテスの両河）でも、治水灌漑の組織化の必要から、中央集権、官僚制、国家形成が推進されるが、管理に対する文字の必要から能力をもつ吏僚層が指導的地位を占めるにいたり、ここに精神的貴族層が生じた、と Jaspers は説く。この点 Parsons の見解は、“archaic societies” と “the <<historic>> intermediate societies” を区別するなど、ややことなる。

6) 中国の場合については、貝塚茂樹「中国の歴史」（上中下3冊、岩波新書）ラティモア「中国」（小川訳、岩波新書）という手軽に入手出来る好著がある。

まな工芸・農業・医学・天文・数学などの知識が蓄積・発展されたことは、周知のとおりである⁷⁾。

有史以来数百の国家がこの地上に興亡するが、その多彩な運命の変転の中において、以上の事情は、洋の東西を通じてかわらない。それぞれの民族（あるいは国）が生きていく場合、あるいは政治・行政・司法のために、あるいは次代継承者育成の教育活動のために、上記のような識字知識人層は不可欠であるが、この知識人層はさらに、(1)その国の農学・工学・医学・薬学・自然科学・数学などの理工学的知識の水準向上のために、(2)前章で説明した用語の適用を拡大してここで「人文諸学」と呼ぶものの形成発展のために、さらに(3)詩文書画などの芸術的活動の分野において、その国の知的精神的伝統の充実につとめ、その民族の歴史に光彩をそえるのが一般であった。国によって事情がかなりちがうし、知識人にもいろいろの場合が生ずるけれども、大抵の伝統社会では、その国家・政治に対して強い自覚と責任感が知識人の倫理として要求されるとともに、他面、これに応じてその使命に忠実な人々があり、その努力とその国の土着文化との相互作用の上に、それぞれ特色のある知的伝統が形成されていった⁸⁾。

かようにして、それぞれの民族社会（簡単な表現としては「国」「国家」）は、土着文化とならんで、知識人層を担い手とする知的伝統をもっている。さらに、その中に長い交流の歴史をもつ文化圏は、例えば西洋のキリスト教文化圏やイスラム文化圏のように特色の多い知的伝統をもってい

る。また、儒教・大乗仏教で特徴づけられる文化圏も、同様にして考えることができる。

A: 「枢軸時代」——いまたまた仏教、キリスト教の諸宗教および儒教にふれたが、便宜この機会に K. Jaspers が枢軸時代(die Achsenzeit)と呼んでいるものを中心にしておきたい。

わが国では釈迦牟尼 (ca. 563B. C. ~ ca. 483B. C.), 孔子 (ca. 552B. C. ~ 479B. C.), ソクラテス (469/470B. C. ~ 399B. C.), イエス (ca. 4B. C. ~ ca. 30A. D.) の四人を世界の四聖と呼ぶ慣習がある。四聖と呼ぶのはこの四人が「人類の教師」として広く強く尊敬をえているからであるが、同時にまた、このうち三人がほぼ同時代に生きていることにすぐ気付く。イエスの場合もその先輩の予言者たち（イザヤ、エレミヤ、エゼキエルなど）をとれば、同時代性がいっそう明瞭になる。さらに、歴史的背景が、中国流について「春秋戦国」的である点も共通している。この事実に注目した歴史学者は以前にもあったようだが、K. Jaspers は、このことから、500B. C. を中心に、800B. C. ~ 200B. C. の時代を、人間史上決定的意味をもつインノヴェイション（彼の言葉では障害突破 Durchbruch）が進行したという意味で「枢軸時代」と名付けているので、以下便宜上この呼び方を使うこととする。

「枢軸時代」という時代設定は、文化宗教 Kultur-religion（世界宗教 Weltreligion、倫理宗教 Ethische Religion、高等宗教）とよばれるものに対して、その瞥見の機会をあたえる⁹⁾。

7) T. Parsons, *Societies*, 1966 Prentice-Hall. p. 26—51 は、この識字知識人層について二つの場合を区別する。第一は読書能力が所有者および使用目的において限定的である場合、つまりマジックや宗教的秘儀の類に使用目的が限られ、層自体小集団である場合である。（いわゆる craft literacy）。第二は、支配層の男子成人はすべて読書人であることが制度化されている場合である（full literacy）。彼は、識字知識人層のこの発展を、これと平行する宗教の推移と結びつけ、これによって社会進化の段階を画するが、この議論の是非はしばらく措き、革命前の中国における literate (士大夫) と illiterate (庶民) との二階層的な social stratification は社会学的にももっと取上げられてよい問題ではあるまいか。また、中国のこの stratification system の見事な叙述分析として、吉川幸次郎「中国の知識人」「二つの中国」「中国における教養人の地位」「士人の心理と生活」（全集Ⅱ所収）があることも注意しておきたい。

8) わが国の精神的伝統を論じた好著として、内村鑑三「代表的日本人」（鈴木俊郎訳、岩波文庫）および新渡戸稻造「武士道」（矢内原忠雄訳、岩波文庫）がある。何れも代表的なクリスチヤンの手になる点、意義ふかい。なお「代表的日本人」が挙げる 5 人は、西郷隆盛（新日本の建設者）、上杉鷹山（封建領主）、二宮尊徳（農民聖人）、中江藤樹（村落教師）、日蓮上人（仏教階層）であるが、最初の二人の政治家の場合も、西郷隆盛は陽明学を学び、鷹山は細井平洲を師とし、儒学の伝統がそのバックボースをなしていた。

9) この場合、儒教(Confucianism)は若干の不規則性をもつ。その不規則性がどこにあり、どこまでが文化宗教と共通点をもつかは、適宜自由に考察されたい。ソクラテス、プラトー、アリストテレスに由来する哲学では、いっそうこの不規則部分が肥大するが、なお若干の点では文化宗教、儒教と共通するものをもつであろう。

周知のように、仏教もキリスト教も、ともに至高の位置におかれれる創始者と基本教典（創始者の伝記をふくむ）をもち、究極的価値体系はそこに学ぶべきものとされる。この点、儒教も同様であり、ここにも孔子があり、「論語」などの四書五經がある。

いずれにおいても、この創始者を至高絶対的地位においてその使徒・信者の集団が逐次拡大していくが、人間的（humane）なものの尊重を中心とするその教義は何よりも倫理的であり、信者に対して、儀礼（ただし、以前にくらべれば遙かに抑制された儀礼）の尊重とともに、倫理的行動を要求し、さらに、死後の世界（天上、後世）における彼の位置は、主としてこの倫理化（と若干の儀礼の尊重と）の程度によって決定される、と考えられる。

信者は、宗教的共同活動の場所（教会、寺院）を通して、要素的集団を形成するが、この要素的集団の積み重ねの上に立つ最高規模の教団は、必ずしも民族的 ethnically には限定されず、原則的には全人類的である。また、この全体的教団内での信者相互間の関係は、教義にしたがって、独自の秩序をもち、世俗の世界の秩序と独立であるのが一般である。

さらに、行為の倫理的評価に当って内面的側面が重要視されるから、おのずから人間像が精神化されるが、教団内部では、職業的に宗教的行事をいとなむ祭司とならんて、世界の意味の理解や経典の解釈に専心する神学者・哲学者や人間内面の純化に生きようとする宗教人（とくに神秘主義者）も重きをなすようになる。Jaspers が障害突破（Durchbruch）とか軸（Achse）と呼んだのは、かようにして、人間像が全面的徹底的に転換され、生活・文化・社会に様相の根本的变化が生ずるからである¹⁰⁾。

以上、いわゆる「枢軸時代」を中心にえがいたのは、ここから始まる人類史上長大な精神的・社会的転換の外部的輪郭にすぎない。宗教全体にとっては、まず原始宗教からここにいたるまでの長い前史があるし、また倫理的文化宗教自体にとっては、この外郭におおわれた内面の動きが、つねに複雑かつ重要である。ただこういう宗教固有の諸問題の考察に対して、ここでの外部的輪郭の概観は、その一つの手懸りになろう。

A：広義における人文諸学——アメリカの Marsh 教授と本学の萬成博教授との、永年の着実な共同研究による “Modernization and the Japanese Factory” の刊行に少し先立って、イギリスの社会学者 Ronald P. Dore 教授が著わした British Factory—Japanese Factory; The Origins of National Diversity in Industrial Relations, 1973 Allen and Unwin は、その高度経済成長の基礎となった日本の、きわめて特色のある労使関係をその内面から分析して世界の社会学者の注目を惹いた。同様に彼が 1965 年公にした「江戸時代の教育」も、徳川時代の日本社会を、今の日本との関連において社会学的に分析した好著である¹¹⁾が、ここでは社会学を学ぼうとする人々に一読をすすめたい。以下しばらく、この模範的分析を中心に、徳川時代の教育と学問を——簡単のため、男子の武士の場合に限定して——調べてみよう。

江戸時代の教育の明治以後の日本への遺産とその功罪の対照表を、本書はその終章で、いわば結論の形であたえているが、「日本語版への序」では、タンザニアの今の教育とくらべながら、この点、要約的に次のように言う。

「経済が発達して、社会一般が官僚化され、教育制度をそれに見あった資格付与の機関、個人の社会移動の手段にしてしまおうとする強い圧力が

10) Jaspers は「この Durchbruch 以来今日までわれわれが、それとともに生き、それによって生きた人間」(der Mensch, mit dem wir bis heute leben), 立入っていえば「この Durchbruch 以来人間は、人間形成において力づよく豊饒この上ない成育をとげるようになるが、人間がかようにして人間として到達しうるところのもの」を考える。かような人間ないし人間像が生れている時期とところ、つまりこの Durchbruch が行われているところ、そこには彼のいう Achse があると彼は見る。したがって、彼にとって枢軸民族（die Achsenvölker）の反対語は「Durchbruch を知らぬ民族」である。（Vom Ursprung und Ziele der Geschichte, SS. 19—42, 上掲、邦訳, pp. 16—34. ヘーゲルに「あらゆる歴史はキリストをめざし、またキリストから出ている。神の子の出現は世界史の枢軸である」という言葉があり、Jaspers は枢軸という言葉をここから取ったようである）。

11) すぐれた邦訳（松居弘道訳）が岩波書店から出ている（本書からの引用はすべてこの訳書による）。なお彼には、「都市の日本人」「日本の農地改革」などの日本研究がある。

加わってくる以前から、それと違った教育思想——学んで、ものを学んだこと自体に喜びを感じる人間を作り、教育されて、自分の得た知識を活かして仕事をすること自体に満足感が得られる人間を作ることが教育の目的であるという思想——が伝統社会においてしっかりと固っていて、そして広く行きわたっている国は幸せだということ〔が私の感想〕である。

幸せというのは、合理的社会制度の設立、民主化ばかりでなく、経済成長自体のためにもかかる伝統が好条件となるという意味でも幸せである。ヨーロッパでは、特にスコットランド、オランダなどでは、新教キリストがその役割をはたし、日本では儒教中心の道義教育もその役割を果したと思う¹²⁾。

前にことわったとおり、ここでは簡単のため、武士階級の男子の教育と教養とだけを問題とするから、おのずから儒教が教育と教養の中心になる。教育は、家庭での素読にはじまり、藩校や塾での学習に進み、時としては他郷への遊学も行われる。儒教といえば、すぐ厳格主義が想像されるが、他の側面も忘れるべきではあるまい。まず、教育の手段としては中国の著作、とくに儒教の經典があり、教育の目的は、第一義的には、道徳的性格を養うこと、第二次的には「武士の義務を正しく遂行するために必要な、人間と実務と統治の諸原理に関する知識を経典から得ること」と教授は要約する（同書 p. 53）が、その通りであろう。さらにこの場合、治国安民が支配層たる武士の責務であること¹³⁾、そのためには何よりも人材の育成が必要であること、——この二点が当時の人々のきわめて強いコンセンサスであり、教育もこの観点から以上の方向に熱心に推進された。

しかし、同時に忘れてならない他の側面として、中国の詩文の書や史書が同時に尊重され、書画の

趣味が貴ばれ、こういう教養は、下級武士をふくめて広く深く滲透していたという事実がある。したがって厳格な儒教倫理に対して、一般に詩文・史書・美的趣味などの対重がはたらき、自然の調和と均衡が実現されていた¹⁴⁾。同時にまた、『人間は「性善」であるから、個人としても集団としても、完全善（「聖人」）の生活に到達する可能性がある』という儒教のオプティミスティックな人間観に対する批判もこの時代のすぐれた儒学者によって発展され、さらに本居宣長によって国学に攝取される点も注意されてよい¹⁵⁾。

さて以上で見た江戸時代の武家男子の教育教養が、(a)何よりもまず、humaneであることを特に重視する「枢軸時代」の古典とその系列の文献による人間形成を目標とすること、また(b)学習のレパートリーは、道徳・思想の文献のみならず、史書・詩文をふくむこと、さらに(c)知識人の社会的責任が行動決定の重要な基準となること（今の場合は、支配層としての政治的責任が重要であり、政治・政策が大きな関心事となる）は見易いが、かように見えてくると、この教育教養の内容は、前章で見たルネサンス以後のヨーロッパの「人文諸学」（the Humanities）と共通の性格をもつことがわかる¹⁶⁾。したがって、人文諸学という言葉を広義に使う場合には、今見た江戸時代の武家男子の教育教養の内容をもふくむことにしては、どうであろうか。

われわれはさきに、伝統社会において識字支配層が、多くは学院・私塾において、文献を用いながら、再生産されることをのべた。教育の方法や学習者の範囲・水準・積極性は、国によって異なるであろうが、師弟を通じて伝承される教育・教養の内容は、いわゆる“the humanities” “humanistic studies”との間に、いまが国江戸時代について見たような共通点をもっており、さ

12) 日本文は Dore 教授自身のものである。文中の「以前」には強調のための圈点が付されている。

13) 「国用に可立様」というような場合の「国」は、江戸時代、本来は藩であるが、日本をも意味した。この二面性が幕末のナショナリズムへの移行に役立った、と Dore 教授はいう（p. 40）が、恐らくそうであろう。

14) この点、吉川幸次郎「日本の儒学」「受容の歴史」（全集、XVII 所収）の一読をすすめる。

15) 吉川幸次郎「仁斉・徂来・宣長」。日本精神史のこの系列については、周知のように、村岡典嗣教授、丸山真男教授（「日本政治思想史研究」）のきわめてすぐれた業績がある。なお、日本への精神史的接近のために和辻哲郎「日本倫理思想史」（上・下、岩波書店）があることを、この機会に注意しておこう。

16) わが国で「文武」とか「文武両道」とかいった場合の「文」を、Dore 教授は、「文脈に応じて英語の civil studies, learning, culture, intellectual matters, the literary arts に相当する」とものと説明している。ここで humanistic studies という言葉を避けているのは、それがヨーロッパ的背景を濃厚にもっているからであろうか。

さまざまな伝統社会の運命を、その精神史の側面から見る場合、一つの一般的枠組みがそこにあるように思われる。この意味から、何か適当な用語でこの枠組みを表わしたいが、新しい格好の用語も見当らないので、ここでは「人文諸学」という言葉を転用し、「ヨーロッパ的文脈にもとづく要素を除外した」という限定を、「広義の」という表現で断ることにして、この意味の（広義の）人文諸学を考えることにしよう。

江戸時代のわが国には、日本の「人文諸学」があった。しかし、日本が「文明開化」に達するためには、維新後西洋の文物を輸入せねばならなかった。日本の人文諸学から「文明開化」に導く思想や学問が直ちに生れたわけでもないし、「社会諸科学」Social Sciences が発展したわけではない。しかし日本の場合は、Dore 教授も分析しているように、それは維新後の発展を大いに助けた。さらにまた、江戸時代、日本の人文諸学を培った日本の知識人の伝統は、今日、国際的な自然科学・社会科学の発展に貢献しつつある。われわれは、さまざまな意味で、江戸時代の日本の人文諸学を冷静に評価せねばなるまい。

しかしいずれにしても、西洋以外の多くの国々に、それぞれ独自の人文諸学があったが、そこから近代的な社会諸科学は生れなかった。それでは、近代的な社会科学が、西洋でその人文諸学から生れたのは如何にしてであろうか。この問題は困難であるが、次にその基本的条件を見よう。

A: 人文諸学から社会科学への発達——西洋において社会諸科学への発展はおこるが、それは如何にしてであるか。

ここでわれわれは社会諸科学について、二つの意義を区別することが必要である。

前章では、社会諸科学という場合、われわれは、自然科学の物理・化学・生物学などとほぼ同じ次元で科学を考えている、とのべ、そこでは、この厳密な意味の（狭義の）社会科学を念頭において議論をすすめた。しかし社会諸科学がこういう形をとるのは、概して、十九世紀後半以後である。それまでは、主観的意見あるいは社会思想が

混入していたり、国による精神的風土の相違が学間に反映していたりすることが多かった。こういう社会科学を、上記の純化されたそれに対して、広義の社会科学と呼ぶことにすれば、それは、ルネサンス以後、人文諸学から（部門によって遅速はある）漸移的に成立する。

さてこの広狭二義のうち、狭義の社会科学は、広義のそれが成立したのち、やや単純化していえば、広義の社会諸科学と自然科学がそのモデルを示す純粹科学との結婚によって生ずるから、その成立それ自体あまり大きな問題はない。人文諸学から社会諸科学への発展という場合、問題になるのは、明かに広義の社会諸科学への発展である。

それでは、こういう発展は如何にして生じたか。西洋の社会と文化の特質という、それ自体きわめて厄介なテーマに関連するこのテーマを完全に扱うことは、もちろん困難であるから、ここでは二三の手近かな論点を取上げて論ずるに止めよう。

西洋の社会と文化の特質についてマックス・ウェーバーの議論が注目すべきものであることは、いうまでもない。この点について彼が、その所説をやや要約的に述べているところを引用すれば、次のとおりである¹⁷⁾。

「文化の全領域にわたって、都市は類いない大きな貢献をのこしている。

都市は政党 Partei とデマゴーグ Demagog を生み出した。徒党 Clique, 貴族の間の派閥, 官職望求者 Amtsanwärter, こういうものの闘争ならば、歴史上いたるところわれわれはこれを見るけれども、しかし西洋の都市以外のところでは、今日の語義における Partei なるものは見出さないし、さらには デゴマーグなるもの（すなわち〔虚偽の宣伝を行うものという意味でなく、その元来の意味での〕政党の指導者とか大臣の椅子をねらう官職望求者としてのデマゴーグたるもの）は、これをどこにも見出さない。

また実に都市のみが、かのいくつかの芸術上の特徴的現象をうみ出した。ミケーネやロマネスクの芸術に対立するヘレーネやゴシックの芸術は都

17) 黒正・青山訳「社会経済史要論」下, p.170以下参照。ここにいわゆる都市が、西洋に特徴的な、古代および中世の自由都市であることに注意されたい。なお、Max Weber, *Gesammelte Aufsätze zur Religionssoziologie*, Bd. 1. 1920, "Vorbemerkung" (大塚訳「宗教社会学論選」第一論文) にも同様の論旨が展開されている。

市の芸術である。

また都市は、今日の意味の科学を産み出した。すなわちかの数学、——立入っていえば、その後のいっそう広汎なる科学的思惟の出発点となったこの学問——が、その後後世にいたるまで一貫して連續的に拡充展開されるごとき形において形成されたのも、ギリシアの都市文化の内部においてであった。

さらに都市は、諸宗教の担い手であった。かのユダヤ教はまったく都市的な教養であった。しかしそれだけではない。初期キリスト教は都市と厳密に結びついていた。現に都市が大きければ大きいほど、キリスト教徒の割合が多くかった。このことたるや、清教 *Puritanismus* および敬虔派 *Pietismus* においてもまったく同様であった。

最後に都市のみが、神学的思索を創造し、司祭く束縛されない思想を創造した」¹⁸⁾

以上の Weber の説明は、西洋の特質という問題に対して明かに部分的である。もちろん完全は期しがたいが、とにかくこれを補充する方向でこし観察をすすめよう。

まず、Weber のこの説明に対して直ちに付加すべきことが二点ある。第一は、以上は概観にすぎぬことである。近代の文化に対して、例えばギリシア、イタリアなどの諸都市は、それぞれの個性に即して寄与しており、都市全体の貢献はその多様な個性的寄与の合成果であることを、忘れてはならぬ。第二に、キリスト教が中世修道院をそだて、それが大きな遺産を残すというように、都市が迂回的に貢献した場合で無視しがたいものもあることにも注意すべきである。

さて社会科学にとっては、地上の俗世としての社会が問題であるが、この側面にも——色彩をすこし変えながら——いくつか特徴が見られる。(a)もちろん道徳的努力は大切だが、しかし社会は、原罪をもつ人間の集りであり、道徳的完成は断念して臨む他ない世界だというのが、キリスト教本来の立場である。(b)再びキリスト教に関連する事

実がある。周知のように、中世西欧はローマ教会の普遍的支配の下におかれ、世俗的権力もこの運命を免れなかった。したがってその後、民族国家が力をつよめ、その主権を主張するようになると、主権の基礎づけなど、厄介な問題が政治理論・社会思想に関して起ってきた。(c)西洋では近代国家が、市民社会・資本主義経済と平行したから、大量成員を含む大規模社会として発展せねばならなかった。したがって、一方では個人の自由を求める、他方では大量成員を包んだ秩序が、政治・経済・社会に関して問題となる。

今まで都市の貢献と近代社会に焦点をおいて、西洋、とくに近代西洋の特徴をのべた。さしあたり問題をこの範囲に限定しながら、大づかみに社会科学の成立を眺めると『問題と対象とは、近代社会の成立に関連してあたえられるが、これに適用される方法および観点としては、都市のうんだ徹底的合理主義と科学的方法ということと並んで、恐らくギリシア以来の伝統をもつ哲学とキリスト教と結びついた人間論がいっそうつよく、この二組の要素の結合から社会科学が生れる』と言えそうである。いずれにしても、なお実践的帰結が求められており、国による精神的風土の相違が思索に影響するが、この点、十九世紀後半以後純化されて行く。

人文諸学から社会科学への発展ならびに近代社会を背景とする社会科学の推移の枠組は以上の通りであるが、次にこの発展推移の外貌を簡単に概観しよう。

B 近代社会と社会科学

われわれは、現実を婆娑、浮世、穢土と呼び、浄土、彼岸に対置する。西洋のキリスト教世界でも、聖書の「山上の垂訓」の「つねに心を清く保ち、敵をも愛せよ。明日のこと、衣食のこと思い煩うな」という理想を厳守しようとする立場から、日常現実の社会生活を“the (secular) world”と呼ぶとともに、他方これを冷厳に観察

18) ここに Adam Smith, *The Wealth of Nations*, Modern Library edition, p. 385 が David Hume にしたがってのべた注意をつけ加えよう。「それまで農村の住民は、ほとんどつねに、その隣人との戦争の状態と、その支配者への農奴的従属の状態におかれていったが、都市で商業と製造業とが発展するにともなって、農村の住民の間にも、まず秩序と良い統治 order and good government が漸次導入され、さらにそれにともなって、個人的な自由と安全 the liberty and security of individuals が導入された」。都市のこの貢献についても、スミスは Weber と同意見であると見てよからう。

し、そこに生きる道を思索する。マキアヴェルリ Niccolo Machiavelli 「君主論」(1531) の「一国の政治にとって、その安全と利益とは、道徳を含めて一切に優先する」という認識とか、スミス Adam Smith 「諸国民の富」(1776) の「経済生活では、人々の私益への配慮は実に根強い動機である」という洞察などはこの伝統から生れるが、これでわかるように、政治・経済その他の社会生活の各分野の考察のすぐれた出発点をなすものは、万人共通の人間的理想的(いっそう詳しくいえば、その実現の困難に対する真摯な反省)である。

人間の共同生活は、部族のそれのように零細単純なものから出発して、今日では、時として数億の人口をもつ国民生活にいたるまで、漸次その規模を拡大してきた。社会生活における理想と現実との間の開きは、こういう共同生活の規模の拡大とともに、性質をかえながら増幅していくが、他面これにともなって、社会生活の各分野の構造・論理(運動法則)・機能などについての事実認識もまた、進展蓄積される。西洋についていえば、ギリシアの Plato (428/7 B. C. ~ 347/8 B. C.) や Aristotle (384 B. C. ~ 322 B. C.) はその重要な先駆者であるが、幻想なき人間洞察と広範な事実観察に基づいて、政治や経済の体系的考察が進められたのは、近代に入ってからである。ホッブズ Thomas Hobbes の『リヴァイアサン』(1651)、ロック John Lockc の『市民政府論』(1690)、モンtesキュー Montesquieu の『法の精神』(1748)、A. スミスの『諸国民の富』(1776)などの、国民を基盤とする近代的大規模社会の原理と構図を示す建設的理論が生まれた。

19世紀後半、市民革命(1776年のアメリカ独立宣言、1789年のフランス革命)とイギリスの産業革命とが並行して起こるが、この結果生じた近代国家と産業社会ないし資本主義経済は、人文諸学の発達と相まって、19世紀以後、社会科学のさらに新しい発展をもたらした。ローマ以来の長い歴史をもつ法学 (Jurisprudence) は別として、ケネー Fr. Quesnay の『経済表 Tablean Economique』(1758) によって確固たる科学的わく組みを得た経済学 Economics は、社会的必要にも

促されながら、着実に発展したが、他面、ヘーゲル G. W. F. Hegel の『法の哲学』(1821) やトックヴィル Alexis de Tocqueville の『アメリカのデモクラシー』(2巻、1835~40) のように、優れた全般的洞察も公にされ、コント Auguste Comte は「社会学」という言葉を創始した。また資本主義社会の諸矛盾に対しては、早くから批判が起きたが、この点では『資本論』(3巻、1867~94) の著者、マルクス Karl Marx の影響が重要である。同時に経済学の伝統のなかでは、1870年以降、ワルラス Léon Walras およびマーシャル Alfred Marhall などによって基礎理論の深化と体系の拡充強化とが始められ、大きな成果を生んだ。

1859年のダーウィン Charles Darwin の『種の起源』が進化論を説き人間の起源の見方をかえたことは、よく知られているが、考古学、心理学、人類学などの分野では、シュリーマン Heinrich Schliemann (1822~90)、パヴロフ Petrovitch Pavlov (1846~1936)、フロイト Sigmund Freud (1856~1939)、ケーザー Wolfgang Köhler (1887~1967)、マリノウスキイ Bronislaw Malinowsky (1884~1972)、レヴィン Kurt Lewin (1890~1947) らの名前が物語るように、人間の由来、能力の研究と科学的人間分析の深化充実がすすみ、他方、社会学でもデュルケーム Emile Durkheim (1858~1917)、M. ウェーバー Max Weber (1864~1920) などが諸方面的研究成果の攝取のうえに、経済、政治、宗教、歴史の模範的な分析をのこすとともに、そのための基礎理論を考案した。また経済学では、1930年代の世界不況への対応以後、たとえばケインズの名が示すように、めざましい展開が行われ、経済生活自体に対しても、顕著な影響を及ぼしつつある。

III 社会科学の方法

以上のような社会科学の歴史的背景の下に、今日では、各国の大学、研究所その他の研究機関で、十分訓練を積んだ専門研究者が、その専門領域で緊密な国際交流をはかりながら社会諸科学の研究を推進しており、さらに優れたアマチュアもこれに協力している。この点、自然科学の場合と

大きな相違はなく、〈今日の社会科学の特色はここにある〉といつてもいいほどこの事実は重要である。今日の社会科学の方法を考えながら、この事情をもう少し調べてみよう。

自然科学の場合は実験によって理論の成否を精確に決定できるが、社会科学、人文科学ではおおむね実験は利用できない。ここでは、古くから文献の利用と思索によって研究が進められ、今日もその意義は減じていないが、しかし、壮大な理論を築いただけで科学の任務が終るわけではない。事実の観察によってこれを検証することが必要になる。こういう研究方法としてまず重要なのは、一方に膨大なデータの集積があり、他方、迅速かつ高度にそれを利用できる計算機をもつ統計的分析である。この点について経済学、とくに量論経済学 *Econometrics* が多岐多彩な技法を開発し、現実の施策にも貢献していることはよく知られている。

一般に、理論にはマクロ (*macroscopic* 巨視的) とミクロ (*microscopic* 微視的)との区別が可能である。マクロ、ミクロ両理論ともに統計が結びつき得るが、おおむねマクロ理論に結びつくことが多い。また対象の性質上、網羅的な悉皆調査が困難な場合には、適当に（たとえば無作為 *at random* に）見本集団 *sample* をつくり、これについて標本調査 *sample survey* を行う。このような統計的技法は確率論の応用によって理論化されており、その分析技術自体もいよいよ高度化しつつあり、さらにそれは経済以外の分野にも十分応用できる。経済以外への応用の著しい場合としては、投票のごとき政治的態度、政治行動に関するさまざまの統計的分析、特定の問題に関する公衆の態度を測る意識調査、世論調査などがあるが、また場合によっては、研究者自身が、研究目的に応じて聴取調査などによって〈手づくり〉で資料を作成しなければならないこともある。

いうまでもなく、統計的方法が用いられるのは数量的定量的属性についてであり、性質的定性的属性には別の手段が必要なことが多い。その重要な手法としては、たとえば、①個々の事例を丹念に調べるケーススタディー（事例研究）、②社会（文

化）人類学でよく用いられるフィールドワーク（ある期間、対象集団と生活、言語をともにしながら、その行動様式の全面理解につとめる作業）がある。また、心理学で実験がよく用いられるとはいうまでもないが、レヴィン以来、心理的理論の検証のため、小集団を適当に（ときとしては若干個）構成し、これについて実験を行うことが試みられている。

社会科学の研究作業操作は、以上のようなものであるが、これとともに利用される方法として重要なものに理解 (*Verstehen*) がある¹⁾。学問は事象の因果的説明を求め、自然科学の場合は、この説明が外的に観察される因果関係について行われるが、人間の行為の場合は、それだけでなく、その行為について主体が抱く動機から出発し、その動機をその行為の原因とみて、因果的説明を行うこともできる。これが理解であるが、また人間の行為の型を表す用語や社会科学の概念には理想型 (*Idealtypus*) と呼ばれる種類のものがよく用いられることも、これと関連して注意される。

社会科学の方法と自然科学の方法とは、大部分同一であることは以上で明白であるが、今日では、ときとして、システム的接近や情報理論のように自然科学から出発した方法が、体系構成の根本に利用されるところまで、両者の距離は接近している。両科学の方法は、水と油のように断絶し、この断絶から両科学の区別が生ずると説く議論もあるが、これは誤りである。

是非善悪に関する価値判断をまじえない冷静な認識を価値中立的（あるいは没価値的 *wertfrei, value-neutral*）という。社会科学的認識は、自然科学的認識と異なり、イデオロギー性を含み、価値中立的たりえないという主張があるが、これも誤りである。科学以前の日常のビジョンや、科学の結果を応用した科学後の政策的判断は、当然、価値判断を含む。しかしこの中間の科学的認識は、学問的操作によって行われるかぎり、価値中立性の目標を、完全か完全に近く達成できる。

このように科学的認識に価値中立性を要求するのは、それが客観的妥当性を必要とするからであ

1) 「理解の方法」を學問論的に説明し、さらにそれを社会科学的分析に利用して、すぐれた貢献を残したのは Max Weber であるが、この点まず大塚久雄「社会科学の方法」(岩波新書) の参照をすすめる。

る。換言すれば、それが何らかの価値理念を前提すれば、その理念の支持者にしか妥当しないものになるからである。したがって例えば、福祉のように一般公衆が広く支持する理念から出発した判断は、便宜上、客觀性をもつ科学的認識と同様に扱われることがある。いわゆる社会工学では、このように広く支持される要求、理念から出発した応用科学的研究が多分に含まれている。

IV 現代社会科学の性格

現代社会科学の方法に関連して考えられるのは、現代社会科学の性格である。現代社会科学について顕著な事実は、経済学の発展である。巨大な現代工学に対して物理学の発展とその応用がその基礎となしているが、経済向上のための多様な経済政策と、既述の経済学の発展、応用との間の関係も、これと同様である。したがって経済学は党派とイデオロギーを超えて利用されるが、経済学の場合は、これによって、社会科学が価値中立的要具だということの意味を明瞭に示すわけである。

現代社会学の別の特色は、一方では人間とその文明の由来についての知識の蓄積、他方では神經系ならびに學習の実験による人間能力の実体の究明という事実に基づく。この結果、人間は芸術や哲学の対象にとどまらず、冷厳な科学的分析の対象となつたが、社会と文化の分析は、今日では、この基礎のうえに進行している。また社会科学は、かつては知識人の使命感に基づき、その教養のために学ばれたが、今日では、これに代って、専門的勤務者の業務のための科学が強まりつつある。さらに現象の性質的側面の考察が弱化し、数量的側面の処理が発達したこと、また既成の方法で扱いややすい問題の方向に専門化が進行し、諸部門内の分業が適度に細分化し、実際に重要な問題の研究、とくに＜協学的＞研究が事実上漸次困難になりつつあること、こういう事情も重要であるが、最後に、このような現代社会科学の課題はいかなるものであるかを考察してみよう。

V 現代社会科学の課題

19世紀以後、産業社会は高度化、国際化の歩みをつづけるが、第2次世界大戦後、先進国のは、技術進歩と国際協力に支えられて、不況、失業、貧困からの解放をかなりの程度まで達成した（豊かな社会）。しかしこれと表裏して精神的貧困を生じたことは否安できない。したがってこうした新しい問題への対応も、社会科学の重要な課題となるが、このためには、原始以来長期にわたる人類の精神的遺産を謙虚に見直すことがたいせつであろう。

周知のように、今の世界には、このような先進国とならんで発展途上国があり、その開発が現代の課題である。しかも最近強調されつつあるように、それは、たんに経済開発のみにとどまらず、広範な視点に立たねばならない。それぞれ異なる歴史と文化とを、多種多様にもつのが発展途上国である。発展途上国のこの伝統に広く深い理解をもつことが、眞の開発には不可欠である。この方向の仕事も、現代の社会科学および人文科学にとって重大な任務といわなければならない。このような世界の現状からみて、現代社会科学の役割はきわめて大きく、若干の軌道修正も必要と考えられる。おそらくその伝統を回顧しながら、その根底を深く掘り直し、この新しい基礎のうえにいっそう包括的な科学を建設していくことが、その現代的課題であろう。

後記

1973年4月、関西学院大学社会学部に勤務するようになったとき、学部側から、学部で社会科学概論の講義をしてほしい、という希望があり、つけ加えて、内容はお任せする、例えば拙著「マックス・ウェーバー」（岩波新書）を教科書に使ってやるものも一案ではないか、ということであった。

こういうことから私の社会科学概論の講義は始まった。こういう事情から、最初の年は経済学と新書の拙著を中心に、次の年は新書の拙著を使って講義した。高等学校で学習した知識を基礎に、近代社会とはどういうものかを中心に説明すると

いうのが全体の趣旨であった。

この二年、かような仕方で社会科学概論の講義をこころみたのは、形式的な方法論だけから社会科学とは何かを説明し、それだけで社会科学概論の仕事は終るところの、わが国在来の多くの行き方に対する不満（実質的にも不当だし、学生に対しても不親切だとおもう）からだが、他面、こういう間に合せにも満足できなかつたし、社会科学概論を正面から扱って欲しいと要求する学生もあらわれた。この結果、1975年4月から、私自身の社会科学概論を組立て、とにかくそれを講義して見ることにした。

結局、その後3年間この試みをつづけた。考えて見ると、社会学部の講義の中で社会科学概論は、どの先生の授業や指導にも関連しており、その理解と参加をお願いしてよい科目であるし、その上また、この中に私なりの思索と工夫を盛ってお

り、この点について御検討ねがえれば幸いと思うので、編集委員のお許しをえて、この講義ノートを整理加筆して（試論的色彩を多分に残したまま）本誌に御収載ねがうこととした。

なお、1975年冬、平凡社「国民百科事典」から「社会科学」の項目の執筆を求められたが、それまでの講義ノートの要約をもってその寄稿に充てた（1977年春刊行）。これに対して本稿は、いわばその増補改訂版に当るが、事典では原稿の前半部が（事前の承認にもとづいて）かなり修正圧縮されていたという事情もあり、増補は前半部できわめて大幅に行われたことをお断わりしておく。

この5年間、本学において同僚諸兄からさまざまな御厚誼を忝うした。その御厚誼への謝意をあらわすことに、以上の由来と性質をもつ本稿が些かでも役立てば、實に有難い幸せだと思う。